わたしたちの物語
～音楽と接していてほしい～

橋本保憲さん（73歳）＆大正大学社会福祉学科３年　上野　葵

私、昭和46年の４月に大学に入って、
妻はマンドリンクラブの同級生です。
私はギターをやってたんですけど、マンドリンクラブっていったら、１００人くらいいるわけで。
オーケストラだから、管楽器もあるんですね。
妻はフルートをやってて、私は１年の頃はギターをやってたんですが、中学卒業するくらいから自分でやってたんで、まあ弾けたんですよ。
だからつまらないから、２年から別の楽器を始めました。
マンドセロってあるんですよね。
マンドリンのお化けみたいな大きな楽器。
それと暇だからってんで、打楽器もやってましたよ。
マラカスやらボンゴやら。

今でも大学の先輩たちと楽団を組んでまして。
そっちはもう20年近く続けてて。
途中サラリーマンの時はやってなかったんですが、
還暦の前後で先輩たちから誘われまして。
なぜ誘われたかっていうと、その演奏会をやる場所が滝野川会館だったんです。
「お前、北区住んでるんならよく知ってんだろ」ってことで手伝わされたんですよ。



音楽ボランティアを始めたのは、２００２年だから、４９の時ですよ。
始めたきっかけっていうのが、大学の後輩ですね。
サラリーマンやってて、出勤途中に急に駅で倒れて、

亡くなっちゃった奴がいるんですよ。
忘れもしない。２０００年３月15日なんだけど、
急死しちゃったんですね。
で、そいつの通夜で、また別の後輩と会ったの。
「今何してんの」って聞いたら、
「一人でレキントギター弾いてます。
橋本さん、なんかやりませんか。」
って言われて、そっから始めたのが、49の時だったの。

音楽ボランティアで活動し始めて長いんだけど、去年のことかな。
ボランティアプラザの登録団体の集まりで、
同じテーブルに座ってた人で、私とおんなじ
パーキンソン病の人がいて。
そん時にね、その人が病気のことで
弱気になっちゃってる人だったの。
病気だからこれが出来なくて、ってね。
私はね、病気をそういう風に出すのは、自分に対して
どんどんこう、暗くなってちゃう気がするの。
明るくしてないとね、病気の方から寄り添ってきちゃう。
「私もおんなじ病気なんですよ」って言ったら
凄い驚いてて。



それからの付き合いなんですけど、
毎月やってる北区パーキンソン病友の会の例会で
ギターを演奏して、皆で歌ったんです。
大体10人くらいだったかな。
そしたら、車いすのおじいちゃんが、私が来るってんで
わざわざ来てくれたみたいで。
その人がね、私の演奏聞いて、泣いたんですよ。

私その時すごいびっくりしたんですよね。
いつもよりいい演奏をしたつもりなかったから。
でもね、それ見てたらね、私思ったんですよ。
生で音楽をちゃんと聴くってことは、
人間の心をすごい動かすことが出来るんじゃないかって。

令和８年１０月８日



